

審査の結果の要旨

論文提出者氏名

藤本 大士

本論文は、主として明治維新前後から敗戦後の占領期、およびそれ以降に至るまでの約 100 年に及ぶ期間、日本においてアメリカ人医療宣教師が展開した活動を、医学史・医療史と宣教史の観点から明らかにしようとしたものである。従来、アメリカ人医療宣教師については、個々人の活動や経歴に関する評伝や研究が数件は発表されていたものの、総数 30 人以上となる医療宣教師全体に関してその活動の意義や成果を論じようとした著作はなく、本論文の特徴はまず、宣教師を送り出した各教派・ミッションの年報や議事録などを用いて、アメリカ発の医療宣教の全貌を明らかにしようとした点にある。また、明治維新以降の日本の医学がドイツの影響を強く受けてきたことはよく知られるところであるが、本論文では、ドイツの影響に注目するのみでは分析の行き届かない、公衆衛生分野での諸施策や、パラメディカルと呼ばれる医師以外の医療従事者の活動などについて、アメリカ人医療宣教師の影響を確認しようとしている。

本論文は、大きく分けて三つの課題を設定する。まず、ドイツ医学に基づいて行われた日本の医学教育において、アメリカ人医療宣教師が関与した度合いはどの程度のものであったかという、医学教育史に関わる問題が掲げられる。さらに、医療実践史に関連して、ドイツ医学が主流であった日本において、アメリカ人医療宣教師が活動を継続することができたのはなぜかという課題が提示される。最後に、アメリカ人医療宣教師の役割は、日本での宣教に関して、どのように変化していったのかという、宣教史に関連する問いが発せられている。

本論文では、上述の三つの問いが念頭に置かれながら、主に時代の流れに沿って叙述が行われている。1859 年から明治維新直後までの医療宣教の最初期（第 1 章）、日本においてキリスト教が許容され西洋医学重視の姿勢が明らかになった 1870 年代（第 2 章）、日本での西洋医学の受容の深化に伴い医療宣教の意義が薄れていった 1880 年代から 1900 年前後までの時期（第 3 章）の状況が記述されたのち、第 4 章では、1880 年代から 1890 年代における女性医療宣教師の役割が分析される。女性医療宣教師が、日本人女性には西洋医学の恩恵が及んでいない状況に自らの活動の価値を見出し、ミッション・スクールの校医などとしての役割を果たしたことが指摘されている。さらに第 5 章では、第 4 章の女性医療宣教師に続いて、宣教看護婦やミッションの運営した看護学校が取り上げられる。専門職としての看護婦の重要性を明らかにし、看護婦の養成を進めるうえで、宣教看護婦の活動が決定的な役割を果たした状況が記述されている。

第 7 章では、アメリカ聖公会の医療宣教師トイスラーの活動と、彼が築地に設立した聖路加病院（のち、聖路加国際病院）が取り上げられる。外国人への医療提供と公衆衛生事業において聖路加病院が重要な位置を占め、日本のミッション病院の中で最も成功した事例となったことが指摘されている。続く第 8 章では、第二次大戦後、アメリカ医学の受容の要が説かれる中で、聖路加病院で院長を務めた橋本寛敏が、トイスラーの理念に基づく活動を継続・拡大していった経緯が記述され、第 9 章ではさらに、第二次大戦後の、聖路加病院やそれ以外のミッション病院、とくにセブンスデー・アドベンチスト教会、アメリカ南部バプ

テスト連盟、アメリカ南長老教会の活動が取り上げられる。本論文の分析によれば、戦後はチームとしての医療宣教が発展し、とくに病院付き牧師（チャプレン）の役割が拡大した。

以上の記述に基づき、本論文では設定された三つの課題に対し、以下のような答えを与えている。まずアメリカ人医療宣教師の医学教育への関与については、ドイツ医学が主流になる以前には影響はあったものの、1880年代半ば以降はそれは薄れていったとの結論が得られている。ただし、学校を卒業したあとの医師に対する教育や、看護教育には関与は続き、キリスト教的人道主義の実践者としての看護婦の養成には大きな努力が払われたと指摘している。また、医療の実践に関しては、慈善医療、物理療法、外国人を対象とする医療活動、公衆衛生事業など、ドイツ医学に強く影響された日本の医学界が大きな関心を払わなかった領域について、アメリカ人医療宣教師が補完的な役割を果たしたと論じている。さらに、日本宣教におけるアメリカ人医療宣教師の役割については、1880年前後までは、西洋医学の優位を示し、宣教を潤滑化することが大要であったが、西洋医学が普及した1880年代以降は、キリスト教的人道主義の実践者としてのそれに変化していったと観察している。

本論文に関する審査委員の評価は以下のようなものであった。

今までにない視点でアメリカ人宣教医師を包括的に扱っており、科学としての医学のみならず、医療実践を特に宗教とのかかわりで取り上げた点が評価できる。また、資料の全体を調査したうえで医療宣教師の活動に評価を加えており、個々人への評価を越えた総体としての役割や意義に関する議論に説得力を与えている。公衆衛生、パラメディカルの育成、女性の役割に関する分析などを通してアメリカ人医療宣教師の役割の重要性を理解することができ、さらに宣教医師が採用したホメオパシーや「水治療」に関する記述など、代替医療の歴史の一側面が叙述されている点も興味深い。

反面、本論文の叙述に従えば、医療宣教に類する活動は宣教師の資格を持つ医師のみが担っていたわけではなく、特に時代を追うにつれ、狭義の医療宣教の枠内には収まらない活動が広がっていったことが理解できるが、本論文ではそれらと医療宣教の弁別が十分ではないために、両者の相違やそれぞれの特色を明確に把握することが困難である。また、ドイツ医学やイギリス医学と比較した場合のアメリカ医学への評価や、その動向・水準の時間経過に応じた変遷、およびアメリカにおける宗教・宣教観の変遷など、日本に関わる局面に限定されない、医学・医療・宗教・宣教の長期にわたる推移についての記述がなく、さらに、東アジアの医療宣教全般の中での日本の位置づけについても解説がないため、長期・広域にわたる俯瞰的理解が得にくい。宗教史関連では、アドベンチストの特色など、細部にわたる理解についても必ずしも十分ではない点が見られる。

上述のような若干の批判点は残すものの、現時点では、本論文は、アメリカ人医療宣教師の日本での活動に関する、原資料に基づくほぼ唯一の包括的研究として、高い学術的意義を有すると評価できる。資料の扱いや、それに基づくアメリカ人医療宣教師の活動の分析にも、今日の水準に照らして十分と云う学問的な判断が加えられているとみなすことができる。したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。